

# ナイスのナース

「ナイスナイスの球子さん、おはようさん」

今日も、この一言が始まります。

声の主は、看護師になって間もないTさんです。妻が病魔に苦しめられている時、この一声にどれほど励まされ勇気付けられたか分かりません。

認知症の妻は、最近めつきり体力も弱まり、入退院の繰り返しでした。今年に珍しく体調も良く安心してた矢先、秋口に風邪をこじらせ高熱が続くので、急きよ入院しました。

主治医に「重症の間質性肺炎」と診断され、すぐ集中治療のできる個室に移されました。病室には、2種類の点滴スタンドと、心電図、

脈拍、酸素濃度などの計器が所狭しと並べられ、緊迫した重苦しい空気が漂っています。

こんな時、天使のように訪れるのはTさんです。計器の数値を丹念に記録すると、「熱も下がり顔色も良くなったわ。ナイスナイスですよ、球子さん。頑張つてね」と、病状を伝えながら力付けてくれます。皮膚が固くなった腕に点滴の針を刺す時には、「ごめんさいね、痛くて。頑張つてくれてありがとう。やっぱりナイスナイスの球子さんだわ」と、優しく声を掛けてくれます。何気ない一声ですが、これで痛みも少し和らぐようです。

Tさんの気配りは、言葉だけではありません。声を掛けるときは、必

〈東京都〉川添 芳身 85歳

ずベッドのそばにしゃがんで目線を同じくし、やせ細った手を撫でるようになして握っているのです。よく見ると、妻の口元がかすかに動き、涙ぐんでいます。あまりのうれしさに、「ナイスのナースさん、本当にありがとう」と、精いっぱいのお礼を伝えていくようです。看護の神髄に触れ、Tさんにかのナイチンゲールを重ねていたのでしょうか。

はらはらと紅葉の散る11月の末、妻はTさんの手厚い看護に、いとも申し訳なさそうな顔をして息を引き取りました。おそらく、「こんなに優しくしていただいたのに、応えられずにご免なさいね、ナイスのナースさん」と、詫びつつ感謝していたのかもしれない。